

## 論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨の公表

学位規則第8条に基づき、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を公表する。

フリガナ 氏名 (姓、名)	スギット サンジャヤ アルジョン SUGIT SANJAYA ARJON	授与番号 甲 1512 号
学位の種類	博士(国際関係学)	授与年月日 2021年 9月 25日
学位授与の要件	本学学位規程第18条第1項該当者 [学位規則第4条第1項]	
博士論文の題名	Peace for Sale: The Cost of Post-Conflict Stability in North Maluku, Indonesia (平和の売却：インドネシア・北マルクにおける紛争後安定の代償)	
審査委員	(主査) 本名 純 (立命館大学国際関係学部教授)	足立 研幾 (立命館大学国際関係学部教授)
	見市 建 (早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授)	
論文内容の要旨	<p><b>①論文の構成</b></p> <p>本論文は8章構成となっており、序章としての第1章、歴史考察の第2章、紛争分析の第3章、そして和平プロセス分析の第4章と続き、紛争後経済復興を扱う第5章、紛争後の選挙政治を扱う第6章、近年にみる2大ファミリーの政治支配を分析する第7章、最後に終章となる第8章で本研究の議論と学術的な貢献を提示している。</p> <p><b>②論文内容の要旨</b></p> <p>本研究は、インドネシアの北マルク州における地方政治の研究であり、とりわけ莫大な犠牲者を出した1999年～2002年の地方紛争の後、どのように平和が維持され、地方政治の安定化が図られてきたのかを分析するものである。インドネシアでは、各地でポスト紛争社会の不安定が指摘されており、北マルクは平和復興のモデルとも称されている。なぜ、そしていかなる要因によって北マルクの紛争後の平和が維持され、政治の安定化が保たれているのか。その答えを導き出すのが本研究の狙いである。</p> <p>まず<b>第1章</b>では、問題の背景とリサーチ・デザインが提示され、インドネシアの民主化移行に伴う各地での地方紛争の発展と、それらに関する研究動向が紹介され、ポスト紛争地における平和維持について長期的な視野で分析することの学術的重要性が強調される。<b>第2章</b>は北マルクにおける紛争の起源を歴史的に考察し、オランダ植民地時代以来の長い歴史のなかで民族的・宗教的な分断が定着していく過程を描いている。<b>第3章</b>の紛争分析では、紛争のエスカレーションを4段階で捉え、各々の段階で異なるアクターが紛争を拡大していく力学と、利権と権力と宗教をめぐる複雑な対立図を描いている。<b>第4章</b>では紛争終結に向けた和平プロセスを分析し、政府のイニシアティブではカバーできない地元レベルの和平交渉、さらには習慣法に基づく共同体レベルの取り組みを総合的に分析している。続く<b>第5章</b>以降がポスト紛争期の考察となり、まず同章では</p>	

経済復興や避難民帰還の社会支援などに伴い、莫大な資本と復興プロジェクトが北マルクに投下されるが、それが紛争リーダーたちの利権となり、対立のベクトルが暴力から利権争いにシフトしていく過程が描かれている。**第6章**では、紛争後に実施されてきた州知事選挙を分析し、その直接民主選挙のインパクトとして、地元の伝統的権威であるスルタンの政治影響力の低下と、民族アイデンティティを掲げる新興エリートの台頭という権力シフトが起きていることを実証している。**第7章**では、その民主選挙時代の北マルクで政治権力を独占的に支配するようになった2大政治ファミリーに焦点を当て、彼らが各地で行政組織・公共事業・社会政策を牛耳り、州内の政治経済権益を分有するに至る過程を分析している。その上で、この支配的な2大ファミリー（王朝）の「力の均衡」こそが、皮肉にもポスト紛争期の北マルクの政治が安定化し、平和が持続する力学を生んでいると結論づけている。

### ①論文の特徴

本論文の最大の特徴は、北マルク州が経験した紛争後の社会復興のプロセスを客観的に冷静に分析し、平和や政治安定の回復の原動力となったものが、従来、学術的・政策的に提唱されてきた「良い統治」の確立（すなわち公正で民主的な市民の政治参加や、透明性とアカウンタビリティを備えた行政運営）ではなく、その真逆ともいえる汚職や腐敗、ファミリー支配といった「悪い統治」の定着にあり、それが皮肉にも「平和の代償」になってしまっている実態を綿密な現地調査から抉り出している点にある。この「悪い統治」を謳歌する新興エリートたちが、暴力紛争に明け暮れるより、皆で利権と権力を分有することの“旨み”を再発見するに至ったことが政治の安定化と平和維持の決定打であるとし、それによって浮き彫りになる「良い統治に基づく平和」という理想論のパラドクスを指摘する点に本論文の大きな特徴があると言える。

### ②論文の評価

審査委員会は、次の3点を高く評価した。**第一**に、本論文は一義的に北マルク政治研究として長期的視点からポスト紛争期の分析を行っており、先行研究に多いスナップショット的な分析からは得られない知見を多く提供している点に、インドネシア地方政治研究としての大きな学術的貢献が認められる。**第二**に、徹底的な現地調査により、紛争リーダーや政治エリートたちから貴重な情報を得て、権力と利権の実態に迫る希少な実証研究に仕上がっており、地域研究として高く評価できる。**第三**に、「良い統治の欠如」が皮肉にも平和や安定をもたらしているという議論は興味深く、そのインプリケーションは北マルクを超えて他地域（アチェやポソなど）のポスト紛争理解に新たな視座を提供し得るものであり、より広くは東南アジアの他国の平和構築の研究にも応用可能な分析視点を提供できる可能性も秘めていると考えられる点である。

本論文の公聴会は、Sugit氏による論文要旨の説明の後、審査委員による口頭試問を行い、活発な質疑応答が行われた。その結果、明らかになった主な課題としては、**第一**に汚職と紛争収束の因果関係について、論理的な説得力の精度を高める必要があるという点。**第二**に紛争後の政治安定に関して、対立が解消したのではなく、その軸が変化している点をよりアピールすることで、紛争に発展しない力学をもっと明確に示せられる点。**第三**に紛争の残滓について、その経験が選挙政治やファミリー支配に作用す

	<p>る力学をより意識的に描くことで、論文の後半部分の一体感が増すと思われる点。そして<b>第四</b>に、権力分有の安定性についても議論の精度を高める余地がある点。</p> <p>口頭試問を通じて、こうした課題の克服のための方向性が <b>Sugit</b> 氏から示され、本研究の今後の発展可能性に期待が持てることも確認された。総じて、本論文の学術的貢献の十分に大きいという認識で審査委員会の評価は一致しており、本論文が本研究科の博士学位論文審査基準を満たし、博士学位を授与するに相応しいものであると判断した。</p>
<p style="writing-mode: vertical-rl;">試験または学力確認の結果の要旨</p>	<p>本論文の公聴会は、<b>2021</b>年<b>4</b>月<b>26</b>日（月）<b>13</b>時から<b>14</b>時<b>30</b>分まで敬学館 <b>KG008</b>号教室で行われた。主査および副査は、論文審査および公聴会での質疑応答を通して博士学位に相応しい能力を有することを確認した。</p> <p>したがって、本学学位規程第<b>18</b>条第<b>1</b>項に基づいて、<b>Sugit</b> 氏に博士（国際関係学立命館大学）の学位を授与することが適当であると判断する。</p>